

森と野（ツルゲエネフの「遊獵者の手記」より）：文苑

著者	山の人, Turgenev, Ivan Sergeevich
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 6
ページ	3 7 - 4 4
発行年	1902-12-21
その他の言語のタイトル	森と野（ツルゲエネフの「遊獵者の手記」より）：文苑 遊獵者の手記 遊獵者の手記
URL	http://hdl.handle.net/2298/5416

森 野

(ツルゲエネフの「遊獵者の手記」より)

〔一〕

山 の 人

春になつた。空には小鳥が面白く囀り、地には若草が、美しい花をつけろむる。春光あまねく満ち渡つて、うららかに、長閑なる時、獵に出かけて行くのは、一きは興あるものである。まだはの黒い空の、彼方此方に、疎らに星屑が瞬いてゐる頃、玄關に出ると、風は撫でるやうに、るよくと面を吹く。耳を澄せば、それともわかぬ夜の唄が聞ゆる。庭前の木立は、まだ闇から包まれたまゝ、幽かな音に、ざわめいてゐる。

先づ、馬車の用意をする時、馬は落付かずに、鼻息しながら、足をばた／＼とやらせる。今し方、目を醒したばかりの、白い鵝鳥が、黙つて、悠然と前を横ぎつてゆく。

あたりの物の音は、其まゝ消失せないので、穩かな、明方の室に、滯つてゐるやうである。車に乗ると、馬は心得て駆け出す。わ寺の側を下に、右の方に曲れば、行手は遙かに堤路長う。池には、はや、水蒸氣が卷きかへつて、うすら寒い。外套の襟を立てゝ、顔を包めば、知らず知らず、ふら／＼とやりだす。

蹄の音高う、馬が、溜水をばしや／＼云はせてゆくと、馭者は、口笛を吹いて興がる。

はや、四露里も來たと思ふ頃、地平線上、一点はんのりと薄紅の色が潮もる。

樺本では、目を醒した鴉が、重々しさうに、飛まわり、うす暗い藪のあたりでは、はや、雀が囀り冷つてゐる。

風は爽やかに、路は判明^{はつきり}してくる。空は明るく、雲はうるはしく、野面は、見渡す限り、鮮やかな緑に。

百姓家の羽目板は、赤く輝いて、背戸のあたり、眠さうな欠伸の聲がする。

〔二〕

曙の色美はしく流れて、金色の光が、満天に擴がれば、谷々では、一きは朝霧が渦巻きかへる。雲雀は、歡びの聲をあげる。眞紅な太陽は、靜かに、聲なく、うらくと東の空に昇る。

雨のやうに注ぎ下すの光。人の心は躍りたつて、さながら小鳥のやう。

爽やかに、心地よく、見渡す限り、明るくなつてきた。近くは、村あるところ、森あり。森あるところ、白堊の家が三つ四つ。遠くは、彼方の小高き丘に、樺林。樺林の先に、沼が見える。その沼で獵をするのだ。

馬は勢よく駈けてゆく。沼までは、もう三露里をばあるまい。

太陽はすん／＼昇つて、空には一片の雲もない。

やつと小高い丘に着いた。まことに美しい眺めではないか。

さながら、霧を透して見るやう、溶々たる流れが、廣野の末に、ぼんやりと見える。流れに沿うて、緑の牧場。緑の牧場に、小さい丘がある。彼方には、地を低う、水鶏みたやうなのが、叫びながら飛びまわつてゐる。

まだ夏じみてゐない。

胸は自由に呼吸し、身体の動作も、何となく力づいてゐる。春の新鮮な氣息を、吹きかけられては、

人の心は如何ばかり、生氣づけられたやうに感ずるだらう。

(三)

春が過ぎ去つて、夏になれば如何だらう。

曙の色が、東の空を染める頃に、小林を分け入る楽しさといつたらない。獵人でなくては、誰が知つてゐやう。

露にぬれて、白く輝いてゐる、草むらを分ければ、行き過ぎた跡は、長い緑の條となつて残る。葉末の露が、音もなくこぼれ合ふ灌木の間を、押分けて行けば、今までためてゐた、暖い夜の氣息を吐きかける。空には苦蓬の香や、蕎麥のかをりが満ち渡つてゐる。遠方には、樫の森が、こんもりと、さながら壁をなせるやう。それが朝日で紅に彩られてゐる。

まだ涼しい。が、何となう、苦しい、重々しい暑さが、近づいて来るやうな氣がする。頭はくさくさの花のにはひで、何だか逆上^{のほ}せるやう。

あたりは、一面に灌木で、眼を遠く放てば、金色に輝いてゐる裸麥だの、狭い縞なりに、畝に生へてゐる、莖のあかい蕎麥などが見ゐる。

車を駐めて、徒歩でゆけば、草を刈つてゐる百姓が挨拶する。行き過ぎると、はや後の方では、さくくくと、鎌の音がする。

太陽はすん／＼昇るし、草は見る間に乾いてくる。はやもう暑くなりだした。

一時間経つた。更に又一時間経つた。天は何處となく雲翳を生じて、暑さは愈々勢を増してきた。

「何處か此邊に、水飲むやうなところはないか。」と草刈を捕へて聞くと、

「はい、この崖の下に、泉が御座います。」

〔四〕

一面に、丈の高い草の生茂つた、榛樹の森を潜れば、小徑が溪底に通つてゐる、檜はその梢を伸べて、泉を蔽つてゐる。泉には銀色の水がふつ／＼と湧き出て、あたりの、やさしい、天鵝絨のやうな、軟かな苔を濕してゐる。

身を屈めて、水を掬つて飲んで、木蔭の、涼しい、風が通るところに、仰向けになると、頭の上では、燃ゆるばかりに、太陽から照り下されて、木の葉は黄色に輝いてゐる。その葉と葉の間からも、眩しいほど、大空がちら／＼とする。

俄かに、風が烈しく吹き立つて、木立はざわ／＼と騒ぎ合ふ。大氣は、さながら振盪されるやう。暴風雨が來たのか。急いで溪から出る。

地平線上に、きら／＼と閃くのは電火か。暑さは蒸すやうで、雲は湧き出で、雷鳴がする。が、太陽はなほ輝いて、まだ獵するとも出来る。

見る見る、雲は空を蔽ふて、手を擴げたやう。

草むらも、雜木林も、一時に眞暗くなつた。彼處に家が見える。さあ、急げといつて、一散に駆け出せば、何たる雷鳴ぞ、何たる雨ぞ。

雨は篠つくばかりに降り注いで、雨やどりした藁屋根からは、風につれて盛んに吹き込む。太陽は、なほ依然として、輝いてゐる——

暴風雨は過ぎさつた。

仰けば、白雲は、靜かに空を徂徠して、地には蒼や、草薺が、一きは床しい香を放つ。

〔五〕

夕暮になつた。

太陽は次第に沈んで、彼方の森に隠れたが、なほ余照は、火事のやうに燃え立つて、遠く天末を焦がしてゐる。遠方では、はや靄が立ちのぼつて、淡く棚引く。

殘照を浴びた木立には、暴風雨の名残が、雫となつて、葉末にとゞまつてゐたが、それも、やがてぼたり／＼と落ちろめる。雫につれて、紅の色も、ちらりとするも暫く、地に落ちて碎ける。

兎角する程に、夕日は全く落ちて、木も、藪も、笹原も、長い影を引きそめた。

星は、夕榮の、焼ゆるばかりの紅のうちに、微かに閃いてゐたが、やがて、それも青い色を放ちそめ、空も紺色をましてくる。

たゞもう、あらゆるものが、無言、無聲の裡に、幽然とくれゆけば、闇は、一面に、野、山、林の丘を掠めて、その黒い幕を擴げるのである。

村に歸つて、宿りを求めねばならぬ時だ。

銃を肩より斜にかけて、疲れるのも厭はずに。急いで歸路を辿りゆく。

はや、夜の色が濃くなつて、行手も分らないのに、後になり、先になりして、犬は闇の中を案内して行く。

俄かに、遙かに黒すんだ、森の一隅から、闇を隈取つて、淡き光に、涼しい月は昇りそめた。

森かげには、家々の灯火がちらりとする。

村につくと、家々では、已に夕飯の仕度を調へて、白布をかけた食卓や、華やかなもし火が、窓越に見られる。

〔六〕

又森に小鳥狩に出かける。

丈の高い裸麥が、兩側から生ひかぶさつて、狭くなつた道を、馬車でゆくのは面白いものだ。麥の穂は、心地よく顔をうち、花は、轍の跡に散りしく。どこかに鶉のなくのが聞える。

行く手に、蔭がありさうな、静かな、森が見える。

白楊の葉が、頭の上で、さら／＼と音をたてると、樺の梢は、僅かに呟ぎ合ふ、やさしい菩提樹の側には、大きな櫟が、鎧武者のやうに、突立つてゐる。

馬車は閑靜なる天地を領して、徐かに軌つてゆく。

窓から見ると、大きな、金色を放つてゐる昆蟲が、動きもしないで、じつと、空中に漂つてゐる。

と思ふと。不意に、思ひ出したやうに、何處かへ消へ去つて了う。日かげでははつきりと見れ、日向ではうす黒くなつて、蚊柱が崩れ合つてゐる。鶯に似た小鳥が、やさしい歌を歌つては、丁子のかをりを求めて飛去る。

次第にふかく押分け入ると、著しく森の香が満ち渡つて、幽寂の氣が、身に染んでくる。

さながら、あらゆるものは、深き眠りに落ちたやう。

風が渡れば、木の葉は、さゞめき合つて、清水のやうな音をする。去年の朽葉からは、高い草が生へ出て、木菌は、大きな頭を、彼處此處に擡げてゐる。

不意に、兎が飛び出せば、犬は吠えながら、後を追ひかけてゆく。

〔七〕

鶴とふ晩秋に至れば、森は、一きは趣のあるものである。

鶴は、深く茂り合つた、林の奥にゐるものでないから、森はづれを探さねばならない。

風もなく、太陽もなく、光も、影も、ろよぎもなければ、物の音も聞えない。静寂なる晩秋の佳日。

たゞ、酒の香りに似た、秋の氣息が、穏やかな空に、満ち／＼てゐる。遠くの野末には、淡い霧が棚引いて。

すでに落葉した、枯枝の間から、深碧の空が窺はれる。菩提樹の梢には、黄い葉が、まだ二つ三つ残つてゐる。

湿つばい土地が、踏めばふわ／＼とする。

高い枯草の莖は、少しも戦がず、莖から莖にかけ渡した、長い蜘蛛の絲が、秋の光にきらめいてゐる。胸の呼吸は、静かに、穏やかであるのに、心には思が湧いてくる。

無言で、犬に氣を配りながら、鳥を探しつゝ、森のはづれをさまよへば、愛してゐた人や、死んだ人、生きてゐる人々の面影が、あり／＼と浮んでくる。

想像の翼が、胸の裡で、烈しく羽搏てば、心臓の鼓動は益々高まつて、長く忘れてゐた事などが、再び目を醒してくる。

回想は、再び還り來らざる「過去」の上に、落つるのである。

越し方、ゆく末、わが生涯は、名残なく、心眼の前に展げられる。

人は、わが心を離れて、わが心を見ないのである。

林中の黙想。黙想を破る可きものは、あたりには、一つもない。

晩秋の太陽も——かなしき音に吹く風も——淋しい、幽かなさくやぎも——（十二月十二日稿）

原稿締切後、止を得ず筆をさらねばならぬことゝなつて、覺束なくも、かゝるものゝためである。一夜づくりで、推敲する隙もなく、あたゝ原作を汚した罪は、幾重にも謝するところである。

紅葉會詠草

長川郎

さよふけて誰にもゆるの情ぞや堤つたひに笛のきこゆる
祭はてゝ物うる媼かへりゆく杉のなみ木に秋の日くるゝ
夕ははは金峰の空に消ゆきて秋風さむし飽田野のはら

筑水

庵の戸に肩寒けなる若き尼のくるぞめぐるも秋の風ふく
鳥狩のかへさをつれにたくれけり檻紅葉ちるたるがれ堤
われもまたすぐせもつ身ぞゆく秋の夕をかたれ旅の新尼

俊佐久

いざ風よ櫻吹きまけ亡き母のみ墓抱きてわれうもれてん
鬼百合にやま蟻多きもりの堂呪ひのくぎの銀杏に錆びぬ